

第一回 猿橋物語

第一部 猿橋物語

<10>

深い谷間。そこに脚のない橋を架ける。その名、猿橋。同市ロ、のよきな難工事。また昭和(とび)の独壇場だった。昭和二十四年の架け替えに活躍した二人の老仕事師のエピソードが残っている。

「私なんか、ジイさんから見れば小僧っ子なしたわ」。同市道分町の組頭、尾股敏吉さん。だが、当時吉五郎さんから聞いた悪い出話を語った。

その後、尾股さんは、そんな仕事を勝った。ただ、「猿橋」という仕事師の世界を「ある猿橋の記」みや、神社仏壇の「と」と書った(四十七年、ふたん記念園グループ刊)という二冊の本をまとめた。猿橋架け替えの苦勞を、足場の神様、と書いたら、まだ元気だったジイさんは相好

十五号、横十二号、高さ四十センチがまた確任とわかり、尾股さんが預かった。「伏せ図(平面図)も起し図(立体図)もロクに書けない人だったが、永年のカンというのか、実によくできている」。三十年ぶりの架け替えが進む時に偶然出てきた昔のヒナ型。ジイさんの声で聞かせるように、尾股さんは胸が詰まった。

滝沢吉五郎さん。お隣の八王子市本町三丁目生まれ。つい先年、九十九歳の高齢で「く」な

戦争直後のことで、年寄りが経験の少ない若者しかいなかった。まして宙ぶらりんの、つり足場、を知る者なをまったくい

予想超す難工事

吉五郎さんは、ハギのくまに細い針金を使って足場のヒナ型を作り、若い者に丸太の組み立て方を特訓した。

たが、現役の時、三丁目の頭(かしら)と呼ばれ、サーカスの小屋掛けや、神社仏壇修理の足場作りはお手のものだった。

と、予想以上の難工事だったらしい。「平場(平地)と違ってね、丸太一本渡すにもロープでつり、何人もの手でたぐり寄せ

最近、ひよんなことから吉五郎さんの作ったヒナ型(縦四

架け替え工事の元請け人は地元猿橋の親方で、当時八王子市方町にいた別の組頭に相談を持ち込んだが、「そりゃ、吉五郎さんでもなきゃ、できないわ」。

それでも、いざ現場にはいる

架け替えの記録

鷲の三丁目の頭、ヒナ型を作り特訓

